

94-J-13

「プロト工業化」から「工業化」へ
——北西ドイツ・ラーフェンスベルク地方を中心に——

馬場 哲

東京大学経済学部

1994年5月

このディスカッション・ペーパーは、内部での討論に資するための未定稿の段階にある論文草稿である。著者の承諾なしに引用・複写することは差し控えられたい。

「プロト工業化」から「工業化」へ
――北西ドイツ・ラーフェンスベルク地方を中心に――

馬場 哲

- I. はじめに
- II. 16～19世紀におけるラーフェンスベルク地方の工業発展
 1. 「プロト工業化」期における麻織物工業の発展
 - (1) 輸出向け麻織物工業への転換と上質麻織物生産の開始
 - (2) レッゲ制度と買入制の確立
 - (3) ヴァーレンドルフ麻織物への重心移動とオランダ式漂白所の設立
 - (4) 労働力と農工関係
 - (5) 麻織物の販路と輸出貿易の形態
 2. 「工業化」への移行――工業都市ビーレフェルトの誕生――
 - (1) 19世紀前半における危機とそれへの対応
 - (2) 19世紀半ばにおける麻織物工業の機械化の開始
 - (3) 関連工業部門の発展
 - (4) 都市＝農村関係の変貌
- III. ラーフェンスベルクにおける「工業化」の諸要因
――シュレーゲンとの比較――
 - (1) プロト工業化の展開とその組織形態
 - (2) 製品の種類と品質管理
 - (3) 企業家（商人）の経営姿勢
 - (4) 労働力の存在・調達形態
 - (5) 国家の政策の影響
 - (6) 産地の規模と中心都市の存在
 - (7) 後続産業
- IV. おわりに

I. はじめに

麻織物工業は16～18世紀のいわゆる「プロト工業化」期のドイツにおける代表的な工業部門であり、シュレーゲン、オーバーラウジッツ、ヴェストファーレン、シュヴァーベンといった輸出向け農村麻織物工業地域が各地に存在した。しかし、18世紀末以降の「工業化」の時代に入るとそれぞれの麻織物業地域が取った対応は様々であり、ある地域は綿工業へと移行し、ある地域は麻織物生産にとどまり、またある地域は再農業化への道を辿った。本報告は、そうしたなかで麻織物生産を存続させながらも、家内工業から機械制工場への移行を達成し、さらにそれを起点として他の工業部門を連鎖的に生み出していったヴェストファーレン北東部のラーフェンスベルク地方、とりわけその中心都市ビーレフェルトの「プロト工業化」期から「工業化」期への移行期にかけての展開過程を概観するとともに、その理由を、「プロト工業化」期にはヴェストファーレン以上の生産・輸出規模を誇り、19世紀以降も部分的には綿工業への移行を伴いつつも基本的には麻織物生産地域にとどまったが、工場制工業への移行や他産業の誘発という点では緩慢な過程を辿った東部のシュレーゲン地方との対比を通じて、探ろうとするものである。

II. 16～19世紀におけるラーフェンスベルク地方の工業発展

1. 「プロト工業化」期における麻織物工業の発展

(1) 輸出向け麻織物工業への転換と上質麻織物生産の開始

西北ドイツのヴェストファーレン地方は、オーバーシュヴァーベン地方とともに中世以来ドイツにおける代表的な輸出向け麻織物生産地域であった。もともと当初の中心地は粗質のレーヴェント麻織物（原料は大麻）を生産するオスナブリュック地方であり、ここで取り上げるラーフェンスベルク伯爵領において輸出向け麻織物工業が発展し始めたのは16世紀以降のことであった。まず輸出を牽引したのは麻織物ではなく麻糸であり、麻織布業の発展は麻紡糸業にやや遅れをとった。農村紡糸業は何ら制限を受けなかったが、織布業は基本的に都市で営まれるべきであると考えられ、1688年の商業勅令でも農村織布工は織機数を最高2台に制限されていたからである。こうしたなかで、1346年以来クレーフェ家の領土であったラーフェンスベルク伯爵領は1647年にブランデンブルク-プロイセン領に移行したが、それに伴う国家的な麻織物工業振興策はラーフェンスベルク麻織物工業の急速な発展にとって決定的な意味をもった。まず、

プロイセンの君主たちは17世紀末～18世紀初頭に徐々に領外の商人による麻糸・麻織物の買付けを禁止した。そして、農村の紡糸工や織布工はビーレフェルト商人に麻糸や麻織物を売ることを義務づけられた。こうした措置の背景にあったのは国庫収入の増大という重商主義的観点であった。都市を介した商品流通を強制することによってアクチーゼ収入の確保が企図されたからである。

プロイセン領への移行に伴う大きな変化としてもうひとつ指摘しておかねばならないのが上質麻織物(Feinleinwand)への重心移動である。既に触れたように、中世以来オスナブリュック地方をはじめとするヴェストファーレン各地で生産されていた麻織物は粗質のレーヴェント麻織物であった。しかし、ラーフェンスベルクでは次第に上質麻織物生産の比重が高まっていったのである。

(2) レッゲ制度と買入制の確立

このような上質麻織物の生産と輸出を軌道に乗せる上で重要な意味をもったのがレッゲ制度である。レッゲ制度とは、一定の品質を確保するためにレッゲ(Legge)と呼ばれる検査所で公的な検査を受け検印を押された麻織物だけを輸出することを織布工と商人に義務づけた制度のことであるが、これは17世紀にはじめて導入された制度ではなく、中世以来いくつかの都市で実施されていた。大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムは1647年にラーフェンスベルク伯爵領を領有すると、有名無実化していたこのレッゲ制度をミンデン侯爵領とともに統一的に実施しようと企て、1652年以来制度の整備に着手した。そして1669年のレッゲ条例によってレーヴェント麻織物について3つのレッゲが設立された。しかし、1677年になると上質麻織物のレッゲの設立が検討されるようになり、1678年12月10日にレーヴェント麻織物と上質麻織物の双方に関わる包括的なレッゲ条例が発布され、ビーレフェルトとヘアフォルトに上質麻織物のためのレッゲが新たに設立された。そして、この1678年の条例の内容が19世紀に至るまで基本的に継承されることになった。

ところで、このレッゲ条例は検査に関する規定だけでなく、工業全体をも包摂するものだったが、ここで注意したいのは、紡糸・織布は都市でも農村でも認められたのに対して、麻糸・麻織物の輸出は都市商人に限られたということである。こうして都市、とりわけビーレフェルトの商人は独占的な取引を保証されたが、さらに、レッゲでの検査を経て検印を受けた麻織物は、規格と品質を国家によって保証されたことを意味したから、外国の顧客の信用も容易に得ることができるようになり、ビーレフェルト商人は、麻糸・麻織物の生産に関わることなくその買付けと輸出に専念できるようになった。言い換えれば、レ

ッゲ制度の確立以降ラーフェンスベルク麻織物工業における生産者と商人との関係はいわゆる買入制（Kaufsystem）になったのである。

それでは、このようなレッゲ制度は現実にはどのような効果をもったのだろうか。それは、財政収入と品質確保の両面から考える必要がある。既に触れたように、レッゲ制度をはじめとするプロイセン当局の麻織物工業奨励策は国庫収入の増大を究極の目的とするものであったから、麻織物の生産・流通の拡大や人口の増大に伴うアクチーゼなどの租税収入の増大、そしてレッゲ制度それ自体からも検査料や罰金などの収入が期待された。しかし、こうした財政的観点は少なくとも直接的な意味では後退していった。レッゲ制度を維持する検査料などの直接収入は変動が激しく、しばしば不足分を国庫から補填しなければならなかったからである。次に品質の確保についてであるが、これも検査強制に対する抵抗が強く有名無実化する場合が多かった。レッゲ制度は、上述のように都市商人にとっては極めて有利な制度であったが、織布工には、逆に著しく不利な制度と受け止められたのである。

こうしたなかで例外をなしたのが、上質麻織物に関するビーレフェルトのレッゲである。まず、上質麻織物のレッゲの場合には、先例がなかったためビーレフェルトの実情に沿う形で条例が定められ、特産物としての重要性、広大な販路、市場における名声を早くに獲得したことが挙げられる。次に、ビーレフェルトに比較的多くの資本力のある商人が定住していたことも重要な要因であった。というのは、ビーレフェルトに上質麻織物の取引を集中させ、織布工に現金を滞ることなく支払い、また資金の回収に時間のかかる漂白や輸出を行なうためにはかなりの資本と一定数以上の商人が必要だったからである。いま、1710～1870年のビーレフェルトのレッゲで検査を受けた麻織物の反数の推移を示せば表1のようになる。18世紀半ばに3万反のレベルに達した後七年戦争によって打撃を受けたが、1825年頃までは変動を繰り返しつつも3万反前後の水準を維持していることが分かるであろう。A.フリーゲルも指摘しているように、プロト工業化期のラーフェンスベルク上質麻織物工業の生産量は急激な増大は示さず、むしろ安定状態を保っていたのである。しかし、それは生産の停滞を必ずしも意味するものではなかった。そのことを示しているのが、上質麻織物内部での種類の重心移動である。

(3) ヴァーレンドルフ麻織物への重心移動とオランダ式漂白所の設立

表2を見ていただきたい。これは1721～1844年にビーレフェルトのレッゲで検査を受けたビーレフェルト麻織物とヴァーレンドルフ麻織物の比重の推移を辿ったものである。1720年代には全体の3/4を占めていたビーレフェルト麻織物

の比重がその後低下し、逆に比重を高めつつあったヴァーレンドルフ麻織物と1765-67年と1780-89年の間にドラマティックな逆転劇が演じられていることを容易に読み取ることができるであろう。

既に述べたように、ビーレフェルト周辺で最初に生産された上質麻織物が生産されるようになったのは16世紀末～17世紀初頭のことであるが、より正確に言えばそれは、目の緩い薄手麻織物（klare Leinwand）であった。これが薄手ビーレフェルト麻織物である。また、これと並んで厚手ビーレフェルト麻織物が生産されていたが、17世紀末からいわゆるヴァーレンドルフ麻織物がビーレフェルト周辺でも生産されるようになり、それが18世紀後半に圧倒的な比重を占めるようになったのである。ヴァーレンドルフ麻織物は上質麻織物のなかでも特に高級なものであり、最高級のものでは1反（60エレ）織るのに7週間を要した。したがって、亜麻や麻糸の需要は増大したが、それは織機数の増大には結びつかなかったのである。われわれは、1719～1853年におけるビーレフェルトの市内及び周辺の織機台数の推移を示した表3によってそのことを確認することができる。

ところで、こうしたビーレフェルト周辺地域のヴァーレンドルフ麻織物生産への特化を決定的に押し進めたのが、オランダ式漂白所の設立であった。ラーフェンスベルク麻織物工業は、17世紀末～18世紀初頭にかけてレッゲ制度と買入制を確立させ、さらにヴァーレンドルフ麻織物を導入したことによって、発展への基盤を固めたかに見えたが、なお漂白部門に弱点をもっていた。ビーレフェルトの麻織物商人は織布工から麻織物を買付けると通例地元の独立漂白工に賃仕事の形で漂白させていたが、地元の漂白能力と在来の漂白方法になお大きな限界があったため、かなりの量の麻織物が漂白のために外地、とりわけオランダのハールレムに送られていた。その場合の漂白料は輸送費と合わせて1反当たり5ターラーにもなり、それが麻織物価格を少なからず引上げていたのである。

こうして、七年戦争以後漂白部門の改善が本格的に始まることになった。すなわち、戦争によってビーレフェルトの麻織物取引は大きく落ち込んだ（表1を再び参照）のであるが、それは当然農村の生産者の状態にも悪影響を及ぼした。このため、プロイセン国王はその原因の調査を命じたが、1763年の調査報告はビーレフェルトにおける漂白部門のレベルの低さとオランダ式漂白法を用いる漂白所の欠如を指摘し、さらにその改善は漂白工自身では無理なので商人が率先して努力するように商人に勧告した。そして1767年9月19日には漂白条例を発布し、それまでの手工業と商業との分離を廃して商人が漂白所を営めるようにするとともに、商業・検査裁判所（Handels- und Schaugericht）を新

設して品質維持のための営業監督に対する商人の影響力を強化した。こうしたプロイセン当局の強い働きかけを受けて最初は消極的だったビーレフェルトの商人組合（Kaufmannschaft）も、1767年にオランダ式漂白法を導入したのである。これがいわゆる旧オランダ式漂白所である。

オランダ式に漂白された麻織物への需要の増大によって1773年には早くも漂白能力の拡張が必要となったが、そのための資金調達が直ちに問題になった。このときまでは漂白所の購入と経営は外部資金で賄われており、漂白所は自己資本をもっておらず、債務に対する責任の所在も明らかでなかった。そのため1774年11月15日に「漂白所の信用力を確保し、その経営と一層の拡大のための資金を調達するために、ビーレフェルトの商人組合に属する28人の麻織物商人が旧オランダ式漂白所の利益関係者会社（Interessentenschaft）を設立した」のである。この結果、利益関係者となった「商人は他の商人を排除して漂白所への所有請求権を獲得」し、他方「漂白所の債務に対する責任は各利益関係者に対する持分証書の支給によってそれに対応する部分に限定された」。但し、会社は出資を見込んでいなかったため、持分証書には額面価格もなく、会社内での投票権も持分証書の数ではなく成員資格と結びついていた。つまり「漂白所は市場での利潤を志向する企業としてではなく、すべての個人麻織物商会の全体利益に役立つ経営として発展した」のである。したがって、フリーゲルの指摘するように、この利益関係者会社はまだ近代的な意味での株式会社ではなかったと言わねばならない。

オランダ式漂白所は設立後順調に発展し、1786年に既に6,420ターラーの自己資本を帳簿上もっていた。以前のように麻織物を外地で漂白する必要がなくなったので、輸送費を節約できた上に、漂白による利益を留保できたからである。成功の理由としては、漂白所の技術的・経営的効率の高さと並んで、麻織物商人が利益関係者、漂白所の所有者、顧客の三役を兼ねて経営に関わったことが挙げられる。そして、こうしたオランダ式漂白所の成功が先に見た上質麻織物内部のヴァーレンドルフ麻織物への重心移動を強力に後押ししたのである。こうしてビーレフェルトの麻織物商人は、互いに独立した経営を営みつつ、麻織物輸出にとって決定的な漂白工程を共同で管理するようになった。

そして1842年には1792年に設立された新オランダ式漂白所が、主としてかつての利益関係者からなる11人のビーレフェルト麻織物商人によって利益関係者会社から株式会社に改組された。利益関係者会社との大きな違いとしては、資本金の設定、株式の発行、所有株式数に応じた投票権などを挙げることができる。こうした株式会社形態の採用は19世紀後半に入って機械制紡織業工場を株式会社形態で設立する際の前提を創出したという点で極めて重要な意義をもつ

ていた。

(4) 労働力と農工関係

この点については、わが国でも既にいくつかの研究が存在するので、要点のみ述べるにとどめる。ラーフェンスベルク麻織物工業の主たる生産者はホイアーリングと呼ばれる小屋住農であったが、彼らはそれ以前から存在した農民やケッターなどとは異なり、共同体構成員の資格をもたない非定住の村落居住者であった。この階層を貨幣収入と農業労働力の源泉として必要としたのは農民であり、彼らはホイアーリングに小屋と付属地を賃貸しただけでなく、「家父長的」にホイアーリングを支配した。そして、ラーフェンスベルク麻織物工業の発展は、こうしたホイアーリング層が「非農業的営業による貨幣収入」を必要としたことに支えられていたのである。新たな生活手段を得たホイアーリング層は結婚して家族をもつようになり、1550年頃には103世帯にすぎなかったが、1672年に3,807世帯、1762年には4,295世帯、1794年には7,064世帯と急激に増大し、ラーフェンスベルク地方の人口全体も16世紀半ばの約31,000人から1722年の53,676人を経て1801年の89,938人へとホイアーリングの増大に牽引されつつ増大したのである。

ところで、ホイアーリング層は食糧の購買者であったから、その増大は穀物や馬鈴薯といった食糧に対する需要を生み出すことになった。こうした状況に呼応して農民は粗放的な牧畜から集約的な穀作への転換（「穀作化 Vergetreidung」）を押し進め、「プロト工業化」論が通例想定するのとは異なり、ラーフェンスベルク地方では食糧を基本的に地域内で調達することに成功した。もちろん、「穀作化」は農繁期の労働力需要の増大という問題を伴ったが、それは、既に見た農民とホイアーリングとの「家父長的關係」とホイアーリングの増大に基づいて解決されたのである。

(5) 麻織物の販路と輸出貿易の形態

17世紀半ばにプロイセン領になって以後外部の商人が麻糸・麻織物取引から排除され、地元、とりわけビーレフェルトの商人に独占的な地位が与えられたことは既に述べた。それ以後18世紀後半までの麻織物輸出の実態については不明な点が多いが（18世紀後半の輸出額の推移は、表5の通りである）、ここで指摘しておきたいのは、オスナブリュックの粗質麻織物の販路がイギリス、オランダ、スペインなどの西欧諸国に集中していたのに対して、ラーフェンスベルク麻織物の販路は、ハンブルク、そしてとりわけブレーメンを経由してイギリス、オランダに最も多く輸出されていたとはいえ、ベルリン、ライプツィヒ、

ケルン、フランクフルトなどの大市を介して多方面に分散していたということである（表6を参照）。その場合重要な役割を担ったのが、行商人（Hepster, Hopser）であった。商品の遠隔地への発送は通例注文に基づいてプレーメンの輸送業者の手で行なわれ、見込販売が行なわれることは稀であった。したがってビーレフェルトの商人は、中継貿易港の大商人に対しては従属的地位にあったといつて良く、輸出先に代理商を置くことすらなかった。その点では、シュレージェンの山岳部商人よりも消極的であったとも言えるが、いずれにせよ委託購買取引を選好することによって高くはないが確実な手数料収入を得て資本を蓄積したものと考えられる。

2. 「工業化」への移行——工業都市ビーレフェルトの誕生——

(1) 19世紀前半における危機とそれへの対応

以上の概観からも明かなように、18世紀末に至るいわゆる「プロト工業化」期のラーフェンスベルク麻織物工業は比較的小規模ながらも順調に発展した。しかし、19世紀に入るとイギリスにおける綿工業の勃興あるいは機械制麻紡織業の導入といった新たな動きによって当該工業を取り巻く環境は大きく変化し始めた。

こうした変化に対してラーフェンスベルク麻織物工業も徐々にではあるが影響を受けることになったが、そのなかで特に大きな打撃を受けたのが紡糸工であった。すなわち、綿糸や機械制麻糸との価格・品質競争のために、イギリスへの麻糸輸出は急激に減少し、19世紀半ばには殆ど完全に停止したのである。したがって、J. モーザーが指摘するように「いわゆる麻織物工業の危機とは、ラーフェンスベルクでは本来紡糸工の危機のことであった」のであり、三月前期の「パウペリスムス」の最大の被害者も紡糸工だったと言って良い。

これに対して、織布工や麻織物商人への影響はやや異なっていた。というのは、表1を再び見ていただければ明かなように、19世紀半ばまでビーレフェルトのレッゲで検査を受けた麻織物は減少していないのである。その理由としては、ラーフェンスベルク麻織物はその品質の高さのためにイギリスやアイルランドの麻織物や綿製品とさしあたり競合しなかったこと、次いで西欧・新大陸への輸出の減少をドイツ関税同盟及びロシア市場の開拓によって埋め合わせたことが挙げられる。しかし同時にここでどうしても指摘しておかねばならないのは、加工が容易で安価な機械製糸の利用が1840年代から徐々に増え始めたということである。このことは、麻織物商人と織布工との関係あるいはレッゲ制度を含むラーフェンスベルク麻織物工業の生産・流通組織の変化、さらにはそれがビーレフェルトの「工業化」に対する引き金となったという意味で極めて

重要な変化である。すなわち、機械製糸の輸入はラーフェンスベルクだけでも1848年に既に20万ターラーに達していたと言われているが、織布工が機械製糸を自ら輸入することは不可能であり、それを担当したのは麻織物商人であった。それゆえ、麻織物商人はそれ以前と違って麻糸取引にも関わるようになり、彼らと織布工との関係は、1840年代以降買入制から問屋制へと転換しはじめたのである。もちろん、商人にしても織布工にしても長年の慣行に対する執着は根強く、転換の過程は極めて緩慢なものであったが、この過程はレッゲ制度の形骸化を伴うものであり、それは1872年に最終的に廃止された。

(2)19世紀半ばにおける麻織物工業の機械化の開始

こうした状況のなかで、ラーフェンスベルクにおいても紡織業の機械化の問題が現実味を帯びてきた。それにもかかわらず、ビーレフェルトの商人は、機械制工場の建設にはなお慎重であった。ビーレフェルトの商人は、その代表格 H. デリウスの意見に代表されるように、機械の導入によってただでさえ貧困に喘いでいる農村紡糸工からさらに仕事を奪うことに対する躊躇をその理由として挙げたが、先に述べたようにビーレフェルトの上質麻織物の売行きが依然好調であり、買入制やレッゲ制度への執着が残っていた限り、機械制工場への移行を急ぐ必要がなかったことが大きかったと思われる。このため、ビーレフェルト商人は機械化に積極的だったボイトをはじめとするプロイセンの開明的官僚から企業心の欠如を激しく批判されることになった。

しかし、ビーレフェルトにおいて機械化への準備が全くなされなかったわけではなく、ベルギーやアイルランドなどの先進国を視察して必要な情報が集められており、それを承けてついに1847年の地元商人たちの集会で機械制麻紡績工場の設立が決議されたのである。ところが、ビーレフェルト最初の機械制麻紡績工場はこの計画に基づくものではなく、それとは別に計画されたハンガリーからの移住者であるボジ家によって設立された。カール・ボジは1847年から兄弟のテオドールとともにビーレフェルトに麻糸紡績工場を建設することを企てた。そして1851年10月に創業を開始し、53年末には当初の予定である5,000錘を達成したのである。しかし、自己資金で生産規模を拡大することには限界があり、株式会社に転換することが必要となった。資本金1万ターラーのうちボジ兄弟は過半を制することができなかったが、引き続き経営を担当し会社名も「フォアヴェルツ Spinnerei Vorwärts (以下, S V)」と改めた。その後もフォアヴェルツは資金不足に悩まされたが、1858年には8,000錘、労働者約500人を数えた。

ボジ兄弟の紡績工場建設は当然ビーレフェルト商人を大いに刺激した。デリ

ウスは1854年11月5日に設立集会を開き、「ラーフェンスベルク紡績工場 Ravensberger Spinnerei（以下、RS）」を設立を決定した。RSは当初より株式会社形態をとり2万錘というかなりの規模を目指していたが、問題はそのために必要な100万ターラーをどう調達するかであった。デリウスらの設立委員会（後に管理委員会に改組）は23万ターラー分を自ら拠出し、残りは外部より募集したが、それは驚異的な成功を収め、1856年には100万ターラー分の株式が引き受けられた。プロイセン王立海外貿易会社、プロイセン銀行、シャーフハウゼン銀行が引受けに応じたのが決定的だった。

このように、RSでは外部資金、特に国家の金融機関からの出資の割合がSVよりも高かったが、経営の実権はビーレフェルトの有力麻織物商人が掌握しており、彼らの共同経営とも言うべき性格を保った。実際の技術指導を担当したのはF.カゼロフスキーであったが、彼はベルリンの工業インスティテュートで学び、シュレージエンの紡績工場設立にも関与した人物であった。そしてSVの場合と同様にイギリスから紡績機を購入し、1857年1月30日ようやく創業にこぎつけた。機械製糸への需要は大きかったため、経営規模は急速に拡大し、1865年には1,500人の男女の労働者と24,000錘を使って、486,442巻（6万ヤードに相当）の麻糸を生産した。

ところで、言うまでもなく機械制紡績工場で生産された麻糸は依然として家内織布工によって製織された。しかし既に述べたように、機械製糸の利用とともに1840年代から麻織物商人と織布工との関係は買入制から問屋制へと移行しつつあり、家内織布工の独立性が掘り崩されつつあった。こうしたなかで機械制織布工場の設立が日程に上ることになった。もっとも、農村家内織布工に対する打撃は紡績業の場合ほど甚大ではなく、後に見るように家内手織業との並存は19世紀末まで続くことになったが、機械制織布工場設立の経緯は機械制紡績業の場合と良く似ていた。というのも、1855年にボジ兄弟が力織機をイギリスから購入したことを嚆矢とするが、ビーレフェルトにおける機械制麻織布業の本格的成立は「機械制織布工場 Mechanische Weberei（以下、MW）」の設立を待たねばならなかったからである。1862年7月にH.デリウスを中心とする暫定的設立委員会（メンバーはRSの管理委員会と殆ど同じ）ができ、50万ターラーを目標として株式募集が始められたが、資金はやはり順調に集まった。最初の支配人は、シュレージエンのクラムスタのもとで働いていた経験をもつH.ナーゲルであり、1864年2月に操業が開始された。力織機はすべてイギリスから購入され、60年代の麻織物の好況期ということにも助られて生産は拡張を続け、69年には約300台の織機で45,345反の麻織物を生産するまでになっていた。

以上、ビーレフェルト麻織物工業における3大工場の設立過程を概観してき

た。いずれの工場も経営陣の交代や増資を行ないながらその後も存続して行くことになったが、60年代までにその基礎が出来上がったと見て間違いないであろう。ちなみに、この3工場の1870年頃のドイツ全体におけるシェアを見ると、紡錘数が約10.5%、織機数が約11%であり、無視できない比率を占めていたことが分かる。表7はこの3工場の1860～90年の規模の拡大を示したものである。但しここで留意しておきたいのは、ビーレフェルトの「工業化」はこの3工場を中心とする繊維工業によってのみ担われたのではないということである。工業都市ビーレフェルトは、繊維工業を起点としつつも様々な工業部門がそこから連鎖的に成立・発展し、しかも次第に金属加工業に重心を移すことによって誕生したのである。

(3) 関連工業部門の発展

既に示唆したように、ビーレフェルトにおける麻紡織業の機械制工場の設立は、紡糸工に対しては手紡糸輸出の激減・機械製糸の輸入の増大による打撃に追い打ちをかける壊滅的なものとなったが、農村家内織布工の生産にはなお存続の余地を残すものであった。その理由のひとつが17世紀以来押し進められて名声を博した当地の麻織物の品質の良さであったが、さらに2つの理由が新たに登場した。第1は、織物の種類・素材の一層の拡張である。代表的なものとしてはダマスト織、ブラッシュ（ピロード）、絹織物の3つを挙げることができるが、これらは、いずれも19世紀末に至るまで農村家内織布工によって商人の間屋制的支配のもとで生産されていた。これらの部門でも1890年代以降力織機が普及していったが、1880年代初頭には麻織物手織工と絹・ブラッシュ手織工がなおそれぞれ1,000人程度仕事をしていた。この事実から言えることは、ビーレフェルトの麻織物商人は機械制紡織工場の共同経営に関わりながらも、独自の経営を決して放棄したわけではないということである。例えば、RSやMWの設立をリードしたデリウスは絹織布業を営んでいた。その意味で19世紀後半のビーレフェルトの工業構造は経営形態という点でも、個々の経営者の経営様式という点でも「二重構造」の様相を帯びていたと行うことができる。

ビーレフェルト麻織物工業の発展を支えた第2の、そしてより重要な理由が、麻織物を原料としてシャツや肌着を生産する縫製業（Wäscheindustrie）の成立であった。縫製業は1859年のビーレフェルト商業会議所報告において、将来有望な工業部門であるとしてはじめて言及されたが、こうした新部門の成立を可能にする上で決定的な役割を果たしたのがミシンの導入であった。縫製業の場合にも当初はやはり農村の特に女性による家内労働が中心で、1860年にミシン150台、縫製女工600人、1873年にミシン2,200台、縫製女工3,000人で生産が行

なわれていた。工場制経営も次第に拡大し、世紀交に工場女工が家内女工をようやく凌駕し、1905年には83の縫製工場・作業場で2,533人が就業していたが、1912年に至っても農村家内労働者の数はそれに遜色のないものだった。

ところで、こうしたビーレフェルトの縫製業に最初に使用されたミシンはベルリンで製造されたものであったが、まもなく地元でミシンの生産が始まり、ビーレフェルトはやがてドイツ有数のミシン生産地へと成長することになった。ビーレフェルトのミシン生産の嚆矢と目されるのは、共にベルリンでミシン生産に従事していた経験をもつC.バエルとC.コッホが共同で設立した《バエル&コッホ》であるが、代表的な工場は、それから派生した《バエル&レンベル》であり、1868年には約3,000台を供給していた。ビーレフェルト全体の生産量は1871年に約300人の労働者で8,600台、1874年に15,000台（販売額約100万マルク）と急激に増大したことが分かる。こうしてビーレフェルトで生産されたミシンはアメリカと激しい競争を展開しながらヨーロッパ各国に輸出されるまでになった。要するに、ミシン生産は縫製業の成立・発展によってビーレフェルトに定着することになったが、地元の需要を満たしたのみならず、輸出工業として都市の工業化と発展をさらに押し進める役割を果たしたのである。

しかし、ビーレフェルト金属加工工業はやがて大きな軌道修正を迫られることになった。その発展を牽引してきたミシン生産が、アメリカのミシン会社シンガーが1880年代に月賦販売を導入して以来輸出市場において苦境に立たされることになったからである。しかし、これに対するビーレフェルトの対応は素早かった。有力ミシン製造業者の一人N.デュルコップが1885年から自転車生産に着手したのである。当初の座席の高いHochradは高価で運転が難しかったため不人気であったが、座席が低く、チェーンと空気タイヤを使ったNieder-radへの移行とともに人気が高まり、1900年前後には他の有力ミシン製造業者も自転車生産に乗り出すようになった。こうして価格も1890年代には1台200～300マルク（労働者の賃金の3～4カ月分）だったのが、世紀交には100～200マルクに、そして1914年直前には20～30マルクにまで低下した。このため労働者にとって格好の乗り物として急速に普及し生産も増大した。1912/13年のビーレフェルトにおける自転車の生産台数は85,000台にのぼり、これはニュルンベルク（125,000台）、ブランデンブルク（115,000台）に次いで第3位につけていた（シェアは13%弱）。こうして、ビーレフェルトは19世紀後半から20世紀初頭にかけて、麻織物生産→シーツ・肌着生産→ミシン生産→自転車生産への工業的基盤を連鎖的に拡大し、工業都市へと変貌していったのである。他に発展を見た工業部門として都市人口・家屋の増大に対応した建材、セメント、ガラス、製粉などを挙げるができる。また、以上のような推移は当然のことな

から工業内部の重心移動を引き起こした。すなわち、ビーレフェルト市内に限っての数字であるが、金属工業就業者は1849年には工業・手工業就業者の1%以下だったのが1907年には24.82%にまで躍進したのに対して、繊維工業就業者の割合は1849年の13.34%から1907年の9.21%へと減少したのである。

(4)都市＝農村関係の変貌

繰り返すことになるが、「プロト工業化」期におけるラーフェンスベルク麻織物工業は、基本的に紡糸業と織布業は農村、取引と漂白・仕上は都市という分業関係のもとに成立していた。言い換えれば、17世紀以来ビーレフェルトは何よりも麻織物取引都市だったのである。したがって先に見たように、ラーフェンスベルク地方全体の人口は16世紀半ばの約3万人から1801年の約9万人へと農村のホイアーリング層の急増に牽引されて約3倍になったのに対して、ビーレフェルトの人口は17世紀半ばから18世紀末にかけては3,000人程度で殆ど増大しなかった。しかし、この頃よりビーレフェルトの人口は増加を開始した。表8から分かるように、1800年頃に約6,000人になり、1850年頃1万人を越えた。但し、ここまでの人口増加の理由は直接には出生率の上昇、死亡率の低下、衛生状態の改善といった要因の変化に負うところが大きく、「工業化」に直接伴うものとは言えなかった。これに対して、19世紀後半からの人口増加は明らかに工業化を原因とするものであった。実際、1843年から1895年までの人口増加はラーフェンスベルク地方全体では1.56倍にすぎなかったのに対して、都市ビーレフェルトでは5.03倍にも達している（表9を参照）。

そこで次に問題となるのがこうしたビーレフェルトの工業化が周辺農村に及ぼした影響である。既に述べたように、機械制綿糸・麻糸の登場によって引き起こされた19世紀前半における麻織物工業、とりわけ紡糸業の危機によって農村の生産者は困窮に苦しんだが、可能性としては機械制紡績工場の設立は失業した紡糸工の少なくとも一部に雇用機会を与えることができたはずである。確かに家内紡糸工のなかでも若い層は工場労働に入っていたが、独立性を放棄して工場管理に服することに対する心理的抵抗、技能不足、より良い労働機会を求めた定着率の低さといった要因のために、家内紡糸工は紡績工場労働者としては必ずしも適格とは言えなかった。そのため、紡績工場は絶えず労働力不足に悩み、遠くシュレーゲンやベーメンからも労働者を募集しなければならなかった。したがって、機械制紡績工場の設立は三月前期以来の農村家内紡糸工の困窮の解消には1870年頃まであまり役に立たず、ラーフェンスベルクは60年代までプロイセンでも移住者の最も多い地方であり、1844～1871年の間にミンデン県全体で43,398人が移住した。先の人口数の推移を見てもこの期間に都

市ビーレフェルトを除くラーフェンスベルク地方の人口は停滞したままだったのである。しかし、縫製業やミシン・自転車を中心とする金属加工業の発展が軌道に乗り始めた1870年頃から農村部の人口も増加に転ずることになった。そして、1890年代に入ると、縫製業と金属工業との間の賃金競争や労働力争奪がきっかけとなって、再び織物工業の農村への回帰、より正確に言えば工場の農村への進出あるいは縫製業・既製服業における問屋制支配の農村への拡張が再び展開することになったのである。それゆえ、農村労働者の多くは農業ないし土地と何らかの結びつきを残しており、実際1882年のミンデン県全域の家内織布工の半分以上は副業として農業に関わっていた。しかし、こうしたラーフェンスベルクの「労働者農民」がヴェルテンベルクの典型的なそれと違っていたのは、零細農業を所有地ではなく借地で行なっていたことである。こうした家屋や零細地の賃借はホイアーリング制度の残滓と言って良いが、「家父長的な支配関係」に基づく農業労働義務は既に消滅しつつあり、ホイアーリング制度は農村の零細土地保有層が工業労働力需要に吸収される過程で次第に解体していった。こうしてビーレフェルト及びその周辺地域は20世紀に入ってルール地方やニーダーラインと比べれば見劣りするとはいえ、ヴェストファーレンを代表する工業地域へと成長していったのである。

Ⅲ. ラーフェンスベルクにおける「工業化」の諸要因

――シュレーゲンとの比較――

これまで16世紀から19世紀に至る北西ドイツ・ラーフェンスベルク地方の麻織物工業の展開とそれを起点とする工業都市ビーレフェルトの成立について概観してきた。以下ではこの過程をシュレーゲンの場合と比較することによってラーフェンスベルクの「工業化」の原因を探ってみることにしたい。なお、報告者は「プロト工業化」期のシュレーゲンについては既にかなり詳細に論じたことがあるので、ここでは必要な限りで述べるにとどめたい。

(1)プロト工業化の展開とその組織形態

何を「プロト工業化」の特徴と見做すかは必ずしも明快ではないが、両地域に共通して検出できるものとして、(1)紡糸業と織布業が農村家内工業の形態で行なわれたこと、(2)主要な生産者はシュレーゲンではホイスラーないしインリーガー、ラーフェンスベルクではホイアーリングと呼ばれた零細土地保有農ないし土地なし層だったこと、(3)こうした生産者が麻織物工業という生業を得たことによって結婚して家族をもつことができるようになったために、農村

人口と農村内での下層民の割合の急激な増大が引き起こされたこと、(4)生産された麻織物の大半が、取引を独占的に掌握する都市の麻織物商人を介して地域外に輸出されたこと、(5)麻織物生産に使われる原料(亜麻・大麻)・麻糸を近隣で調達でき、麻糸取引と麻織物取引とが分離していたために、麻織物商人は麻糸と麻織物の生産過程に関わることなく、漂白・仕上と輸出に専念でき、そのため支配的な生産・流通組織は問屋制ではなく買入制であったこと、の5点をさしあたり指摘することができる。これに対して、両地域の違いを端的に示す事実が農業と工業との関係である。すなわち、シュレージエン麻織物工業の立地は不毛な山岳部であり、ただでさえ不足がちな穀物を北側に広がる平野部からの供給に大きく依存したのに対して、ラーフェンスベルクでは、農村麻織物工業の発展とそれに伴う人口増加のために、農業の集約化と商業化が促進され、「農業と家内工業の絡み合い(agrarisch-heimgewerliche Verflechtung)」が地域内で進展したのである。しかし、この違いが19世紀前半における麻織物家内工業の衰退に際しての紡織工の困窮の違いに影響を与えたとは考えがたい。事実、三月前期のラーフェンスベルクの農村は農民とホイアーリングとの間で緊張を深め、三月革命期にはホイアーリングを主体とする大衆蜂起が勃発したのである。

(2) 製品の種類と品質管理

麻織物の種類と用途は極めて多様であり、シュレージエンとラーフェンスベルクの場合も例外ではなかったが、全体としてラーフェンスベルク産の麻織物のほうが上質でまた品質管理も行き届いていた。但しここで強調しておきたいのは、ドイツで最も粗質の麻織物を生産していたのはラーフェンスベルク地方を除く北西ドイツ(特にオスナブリュック地方)だったのであり、シュレージエンの麻織物は全体として見れば中級品生産地と位置づけられるということである。シュレージエン麻織物工業が17世紀末から約1世紀間繁栄したのは、フランス麻織物の模倣に成功したことに多くを負っており、その転換への対応は織物の製法ではなく、独自の漂白・仕上方法の開発によって果たされたのである。もっとも、18世紀前半の段階ではシュレージエンもラーフェンスベルクも上質麻織物の漂白を地元で行なうことができず、オランダのハールレムに委託することをともに余儀なくされていたが、18世紀後半になるとラーフェンスベルクでは既に見たようにオランダ式漂白所が設立され上質麻織物への特化が促進されたのに対して、シュレージエンの場合にはオランダ式漂白法の導入は試みられずに終わった。

次に検査制度について検討する。その場合に注意しなければならないのは、

プロイセンがシュレージエンとラーフェンスベルクを領有した時期と検査制度が導入された時期との関係である、プロイセン当局は1647年にラーフェンスベルクを領有すると、上質麻織物（さしあたりは薄手麻織物）の採用を促し、その品質を確保するために1678年にレッゲ制度を導入し、逐次それを整備していった。すなわち、ラーフェンスベルクにおける上質麻織物の生産はプロイセン当局の主導によって首尾一貫性をもって遂行されたのである。これに対して、シュレージエンをプロイセンが領有したのは1742年のことであり、このとき輸出向け麻織物工業は既に100年以上の歴史をもちその原型を形造り終えていた。オーストリア領時代の1724年に、プロイセン領に移ってからも1742年、1788年、1827年に体系的な法令が發布され、そこには検査規定が含まれていたが、ラーフェンスベルクにおけるように一貫性を保つことはできず、シュレージエンの検印は外国の買手の信用を得ることができなかつたのである。

(3) 企業家（商人）の経営姿勢

既に触れたように、「プロト工業化」期のラーフェンスベルクとシュレージエンの麻織物工業における支配的な生産・流通組織は、製品の種類や品質管理の点で大きな違いを示しながらも、ともに買入制であった。そしてこのことは、「工業化」への移行局面に際しても一定の共通性を示した。すなわち、西ミュンスターラント、ヴェルテンベルク、オーバーラウジッツなど問屋制が支配的だった麻織物産地では、麻織物工業が停滞し始めた19世紀に入ると綿工業への転換が始まったのに対して、ラーフェンスベルクとシュレージエンはともに麻織物生産地としての性格をその後も基本的に保持したのである。その理由は何よりも、買入制のもとで長らく原料調達に関わってこなかったために、麻織物商人が外地から調達する以外にない原綿ないし綿糸の調達に乗り出す経験や能力を持ち合わせていなかったことに求められる。また、買入制のもとでは製品が売れなくなれば織布工からの買付けを停止することによって市場の動向に対応することができたことも商人にとっては有利なことであった。実際、ラーフェンスベルクでもシュレージエンでも1840～50年代から麻織物生産における買入制から問屋制への移行がようやく始まったが、この過程は極めて緩慢にしか進まなかつたのである。したがって、買入制の存続がラーフェンスベルクとシュレージエンを19世紀以降も麻織物生産地にとどめる上で決定的な意味をもつたことと考えることができる。

とはいえ、ラーフェンスベルクとシュレージエンにおける麻織物商人の間には機械制紡織工場の設立に対する対応には無視できない違いがあった。確かにビーレフェルトの地元商人にしても機械制麻紡織工場の設立に際して当初慎重

であり、外部からの移住者であるボジ家に先鞭をつけられたのであるが、RSやMWを設立した後は、手織工を問屋制的に支配した自己経営を並行して営み、工場の経営も専門経営者に委ねつつも、株式会社を設立・拡大して麻織物工業の機械化に共同で尽力した。18世紀後半以来利益関係者会社の形態で漂白所を共同で経営するという伝統をもっていたことが、そのための重要な前提となったのである。

これに対して、シュレーゲンでは機械制紡績工場の設立は時期的にはラーフェンスベルクに先行していたが、アルベルティやクラムスタの紡績工場のような民間工場にも国家が多額の援助を行なっており、さらにエルドマンズドルフ紡績工場やランデスフート紡績工場にいたってはプロイセン王立海外貿易会社が直接設立したものであり、ラーフェンスベルク地方以上に国家のイニシアティブが目立っていた。逆にシュレーゲンの麻織物商人は、麻織物取引の衰退を契機としてそこから資本を引き上げ、大土地所有が優越する東エルベという特殊な環境のなかで、蓄積した資本を土地購入に振り向け、一部の例外を別とすれば、共同で紡織業の機械化に乗り出すことに最後まで消極的であり、工業化の積極的担い手とはならなかったのである。K.ディットによれば、紡織工場の設立に積極的だったのは麻織物商人よりも綿糸・綿織物商人であり、逆に消極的だったのが、貴族、大土地所有者、農民であった。

とはいえ、ここで注意しておきたいのは、このことは決してシュレーゲンにおける機械制麻紡績業の規模がネグリジブルであったわけではないということである。それどころか、シュレーゲンの紡錘数は1843年に25,007錘（工場数8）、1848年に約42,000錘（工場数8）、1850年には44,050錘（工場数10）とビーレフェルト（表7から明らかなように、SVとRSの紡錘数が合計で45,000錘に達したのは1890年のことであった）をはるかに上回る規模を誇っていたのである。1895年にドイツ全体の機械制麻紡錘数は275,900錘であったが、1896年のシュレーゲンにおける紡錘数は136,500錘であり、単純に比率をとれば49.5%となり、シュレーゲンだけで約半分を占めていたことになる。

ところで、このような麻紡績工程の機械化の急速な発展と比べてシュレーゲンにおける麻織布工程の機械化の普及はかなり遅れた。1861年の時点ではプロイセン全体で僅か244台の力織機しか存在しなかったのに対し、手織機はシュレーゲンだけでなお16,800台も存在していたのである。その後力織機は1880年頃からようやく増加しはじめ、それと対照的に手織機数は1884年をピークとして次第に減少することになった。しかしそうは言っても、手織機の優位は容易には揺るがなかった。すなわち、1895年にシュレーゲンで綿・麻織布業に従事していた労働者は42,240人であったが、そのうち小経営、すなわち手織工

は24,945人でなお59%を占めていたのである。それにもかかわらず力織機と比べた場合の生産性の格差は歴然としており、生産額は1897年の総生産額2,400万マルクの約1/4にすぎなかったと言われている。また織機数を比較すると、1895年にドイツ全体で麻織布業における力織機が17,633台、手織機が22,311台と後者が55.9%でなお過半を制していたが、19世紀に入ってシュレーゲンにおける麻織物生産の中心地となったランデスフートでは力織機1,934台（1894年）に対し、手織機4,115台（1895年）と後者が全国平均をさらに上回る68%を占めていた。このように、シュレーゲンでは機械制麻紡績業の比較的順調な発展とそれを用いた間屋制による手織機を用いた家内工業の残存の並存という事態が19世紀末に至るまで続いたのである。

(4) 労働力の存在・調達形態

「プロト工業化」期の農村麻織物工業の直接生産者（紡糸工・織布工）がシュレーゲンではホイスラー・アインリーガー、ラーフェンスベルクでは小作人ないし間借人ホイアーリングであり、両地方ともに零細土地保有農・土地なし層であったことでは共通していた。また、これらの階層がともにいわゆる「農民層の両極分解」の結果ではなく、「農民の長期的な階層分化」あるいは「内地植民」の結果として理解すべきこともいまや動かしがたい認識となっている。とはいえ、ホイスラー・アインリーガーが麻織布業をもっぱら主業として行なったのに対して、ホイアーリングの場合には農民との関係において農業労働者としての性格をも同時に残していた。これは先に見た農工関係の違いに対応するものと言うことができる。また、ホイスラー・アインリーガーがグーツヘル世襲（保護）隷民であったのに対して、ホイアーリングは契約に基づいて農民に隷属していたという点も両者は違っており、これも両地方の農業・土地制度（山岳地形のため領主直営地の比率が低いグーツヘルシャフト地域と農民経営の安定したグルントヘルシャフト地域）の違いから説明できる。

そこで問題となるのが、「工業化」への移行に際して「プロト工業化」期の労働力がそのまま利用できたのかどうかという問題である。まずラーフェンスベルクについては既に述べたように、麻織物紡績業における連続性を確認することは殆どできない。機械製糸の登場によって引き起こされた19世紀前半における麻織物工業、とりわけ紡糸業の危機によって農村の生産者は困窮に陥り、失業した紡糸工の少なくとも一部、特に若い層は新たに設立された機械制紡績工場での工場労働に入っていったが、独立性を放棄して工場管理に服することに対する心理的抵抗、技能不足、より良い労働機会を求めた定着率の低さといった要因のために、家内紡糸工は紡績工場労働者としては必ずしも適格とは言

えなかった。そのため、紡績工場が絶えず労働力不足に悩み一方で、機械制紡績工場の設立が三月前期以来の農村家内紡糸工の困窮の解消にあまり役に立たないという一見矛盾した状況が1870年頃まで続いたのである。そして失業した手紡糸工の多くは道路建設などに出稼ぎに出たり、ルール地方や海外に移住したのである。

これに対して、シュレージエンでは周知のように強固な世襲隷民制のもとで1807年の10月勅令まで農村住民の移動が禁止されていたが、勅令以後移動の自由が保証されるようになったにもかかわらず、人口移動、とりわけ南ドイツで見られたような州外・海外への移住はシュレージエンでは殆ど行なわれなかった。手織工の形式的独立性への固執、綿織布業への一時的移行、移住のための資金の欠如などがその理由として挙げられる。このため、19世紀に入って以後の麻織物商工業の縮小によって手織工の過剰が生じ、このことが1840年代に頂点に達した「織布工の困窮」の重要な原因となった。既に設立されはじめていた機械制麻紡績工場の雇用能力にはなお大きな限界があったのである。その後1850～60年代にはドイツ国内・ロシア市場の拡大、アメリカ南北戦争に伴う「綿花不足」のために麻織物工業は一時的に復活したが、1875年以降になると多くのシュレージエン山岳部住民は賃金水準の高い工業部門をもつ地域、すなわち近隣地ではオーバーシュレージエンの鉱山業地帯、遠隔地ではルール地方などの西部の工業地帯に移住するようになり、人口は微増、地区によっては減少という事態がもたらされ、今度はこのことが工場労働力不足という形でシュレージエン山岳部の「工業化」に大きな制約を課すことになったのである。なお、これはラーフェンスベルクとシュレージエンに限ったことではないが、紡績業や縫製業において女子労働の重要性が増してきたことが19世紀末の労働力を語る上で逸せないが、この点についてはここでは示唆するにとどめたい。

(5) 国家の政策の影響

ここで問題とする国家とはプロイセンのことである。繰り返すことになるがラーフェンスベルクは1647/66年以降、シュレージエンは1740/42年以降プロイセンの、しかもさしあたりベルリンを別とすれば工業的に重要な領土であった。そして、とりわけ19世紀前半まで両地域の麻織物工業は国家の強力な支援のもとで発展を続けた。具体的な例は、ラーフェンスベルクにおけるレッゲ制度の導入、上質麻織物へのシフトやオランダ式漂白法の奨励、機械制工場設立への資金援助、シュレージエンにおけるシュライエル＝麻織物条例の制定、王立海外貿易会社による機械制麻紡績工場の設立など枚挙に暇がない。しかし、ラーフェンスベルクとシュレージエンには重大な差異が存在した。それはラーフェ

ンスベルク麻織物工業がプロイセンの領土になってから発展を開始したのに対して、シュレージエンではプロイセンによる領有以前のオーストリア領時代に発展を開始しており、いわば原型がそのときに出来上がっていたということである。このことはプロイセンによる政策がラーフェンスベルクでより有効に実施されえたことを示唆しているであろう。そのことが最も典型的に現われている分野が検査制度であり、ラーフェンスベルク、とりわけビーレフェルトのレッゲ制度が極めて有効に機能し、品質を確保して市場での評判を高めたのに対して、シュレージエンでは、もちろん検査制度の整備がはかられたにもかかわらず、十分な成果をあげられなかったのである。したがって、言うまでもないことながら、国家の政策の有効性は、それが同じ目的をもつものであったとしても、対象地域の歴史的経緯によって大きく異なってくると言うことになる。

(6)産地の規模と中心都市の存在

最初に、シュレージエンとラーフェンスベルクとの間には産地としての規模に大きな違いがあったことを具体的な数字で確認しておきたい。すなわち、18世紀後半のシュレージエンの面積は州全体で38,165.8K㎡、麻織物工業の中心地であった山岳部を含むグレンツシュトライフェンだけでも9,829.2K㎡に達したのに対して、ラーフェンスベルクの面積は915K㎡（最も大きかった1816～31年でも1,080K㎡）にすぎなかった。したがってシュレージエンの面積は山岳部に限っても約10倍だったことになり、ラーフェンスベルクはシュレージエンのひとつの郡に相当する程度の大きさにすぎなかったことになる（例えば、18世紀後半のヒルシュベルク郡とボルケンハイン＝ランデスフート郡の面積はそれぞれ917.3K㎡、836.8K㎡であった）。これに対して、シュレージエンの人口は州全体で144.8万人、山岳部だけで53.4万人だったのに対して、ラーフェンスベルクの人口は、1722年に5.3万人、1801年に11.3万人であった。人口密度は1787年にシュレージエン全体で37.9人/k㎡、山岳部で54.4人/k㎡だったのに対して、ラーフェンスベルクは1722年で59人/k㎡、1801年には98人/k㎡にも達しており、「プロイセン国家で最も人口稠密な州」と言われた。

したがって、シュレージエンがラーフェンスベルクと比べて麻織物の生産・輸出量においてはるかに優っていたとしても驚くには当たらないだろう。実際、1792/3年にシュレージエンでは生産額が872.3万ターラー、輸出額が627.8万ターラーを記録したのに対して、ラーフェンスベルクでは1798/99年に輸出額111万ターラーを記録したにとどまっている。また、織機台数を比較するとシュレージエンでは1780年に19,500台、1802年に31,000台だったのに対して、ラーフェンスベルクでは1784年に2,475台、1802年に3,049台であった。シュレージエ

ンと比較してラーフェンスベルクは織機数の比率に比べて輸出額の比率が高いが、これは言うまでもなくラーフェンスベルクの麻織物のほうが高級で1反当たりの価格が高かったことに基づいていた。ともあれ、シュレージエンとラーフェンスベルクは産地の規模という点で約10：1という比率であったが、農村麻織物工業の発展を基礎として高い人口成長率と人口密度を誇ったという点では共通していたのである。

しかし、「工業化」への移行に際してこうした産地の規模の格差はどのように作用したであろうか。その場合にわれわれが注意したいのは、ラーフェンスベルクでは「プロト工業化」期にレグ制度による支えにも助けられて、ビーレフェルトがあくまでも商業と漂白部門に特化しながらも、地方の中心都市としての地位を確立したということである。ラーフェンスベルクにはヘアフォルトというビーレフェルトよりも歴史の古い都市が存在したが、「プロト工業化」期の麻織物工業の展開過程においてビーレフェルトに完全に水をあけられることになったのである。18世紀末のヘアフォルトの麻織物取引高は5,000ターラー程度であったと言われている。もちろん、ヘアフォルトにしても「工業化」の波から完全に取り残されたわけではないが、ラーフェンスベルクの「工業化」がビーレフェルトを中心として遂行されることになった理由として「プロト工業化」期の経緯を無視することはできない。

これに対して、シュレージエンでは面積の広さにも対応して取引中心地が複数存在し、それらがさらに麻織物取引都市（ヒルシュベルク、ランデスフート、シュミーデベルク、グライフェンベルク）と麻糸取引都市（ナイセ、リークニッツ、ハイナウ）とに分かれていた。確かに、19世紀に入ると、それまでのヒルシュベルクに代ってランデスフートがシュレージエンにおける麻織物工業・商業の中心地となり、また石炭鉱床を含んでいたヴァルデンプルク郡（旧シュヴァイトニッツ郡南部）にニーダーシュレージエンの工業は集中する傾向を示したが、家内工業的手織業が19世紀末に至るまで山岳部全域に分散して残存しており、また18世紀以前と同様、シュレージエンにはブレスラウという東部ドイツ有数の飛び抜けた商業都市があり（人口は1880年に272,912人、1905年に470,904人）、金融や輸送の面で山岳部の諸都市はブレスラウへの依存を断ち切ることができなかつた。実際、18世紀には約3千人、19世紀半ばでも約1万人にすぎなかつたビーレフェルトの人口が1911年には8万人を越えていたのに対して、シュレージエンでは18世紀における麻織物取引の中心都市ヒルシュベルクの人口は1787年の6,295人から1905年の19,317人へ、19世紀における麻織物取引の中心都市ランデスフートが1825年の3,344人から1925年の13,411人へというように、人口増加率が低く、規模も小さいものにとどまつたのである。いずれ

にしても、「プロト工業化」期の遺産を受け継いで発展するような中心都市がシュレージエン山岳部にできなかったことが緩慢な「工業化」の一因であったことは言いえて誤りないように思われる。

(7) 後続産業

先に指摘したように、ビーレフェルトを中心とするラーフェンスベルク地方が「工業化」を達成する過程で示した特徴は、麻織物工業の機械化を起点としつつ、上質麻織物をシャツや肌着に仕立てる縫製業→そのためのミシン製造の拡大→アメリカとの競争に圧迫された対応策としての自転車製造への転換という形で「プロト工業化」期の遺産の少なくとも一部を生かしながら工業化に成功したということである。

これに対して、シュレージエンの19世紀以降の過程を単純に「工業化挫折」と規定することはできないが、ラーフェンスベルクと比べた場合、機械制麻紡績業の規模という点では帝国随一の規模を誇りつつも「プロト工業化」期に形造られた麻織物生産に著しく偏した経済構造を、麻織物工業そのものが工業化の波に取り残されたことが明らかになった20世紀以降（1913年にドイツの麻糸生産は1880年と比較して40%、麻織物生産は18%低下した）も抜け出すことができなかったのである。したがってその意味では「工業化」に成功しなかったということも可能ではあろう。もちろん、シュレージエン山岳部においてもヴァルデンプルク郡を中心としてオーバーシュレージエンと比べればはるかに小規模ながら鉱山業（石炭や黄鉄鉱）、豊富な森林資源を生かした木材産業、ガラス製造業、製紙業などの産業が一定の発展をみたが、1928年の時点でさえ、O.シューマンは「住民にとって最も重要な生業部門は繊維工業であり」「繊維労働者の最大部分は麻織物工業に属している」と述べている。

IV. おわりに

以上、16世紀から20世紀初頭に至る北西ドイツ・ラーフェンスベルク地方の工業発展の過程を、「プロト工業化」から「工業化」へという観点から概観し、工業都市ビーレフェルトの誕生に集約されるラーフェンスベルク地方の「工業化」の諸要因を、「プロト工業化」期にはラーフェンスベルク地方以上の規模で麻織物工業が発展し、「工業化」期に入っても麻織物工業を基軸産業とする経済構造を維持したが、他の工業部門を次々に誘発して「工業化」に成功したとは必ずしも言い難いシュレージエン地方との比較を通じて探ってきた。その要点をここで改めて繰り返すことはしないが、今後さらに詰められるべきと思

われる論点を2点だけ指摘して、本報告を終わることにしたい。

第1は、ラーフェンスベルク地方は北西ドイツ（ヴェストファーレンとニーダーザクセン）麻織物工業地域の一角にすぎなかったという点である。この地域の麻織物生産は13世紀以来の歴史をもつが、その起点となったのは大麻を原料とする粗質のレーヴェント麻織物を生産するオスナブリュック地方であり、北西ドイツ全体だけでなくラーフェンスベルク伯爵領に限って見てもビーレフェルト周辺地区のように上質麻織物を生産する地域はむしろ例外に属していた。本報告ではともにプロイセンの領土であったということをも有力な根拠として、ラーフェンスベルクとシュレーゲンを直接対比したが、政治的にも経済的にも多様な諸地域から構成された北西ドイツ麻織物工業地域内部におけるラーフェンスベルクの位置についても立ち入った検討が必要であるように思われる。

第2は、「工業化」と「工業化挫折」とは何か、また両者を区別する指標は何か、という問題である。ここで「工業化」とは何かといった大問題について正面から論じる準備も余裕も報告者は持っていないが、明らかに異なる発展の道を辿ったと思われるラーフェンスベルクとシュレーゲンをそれぞれ「工業化」と「工業化挫折」と規定し分けることにはさしあたり留保を付したいと考える。シュレーゲンは通例「工業化挫折」の典型的事例のひとつと言われているが、麻織物工業に極めて偏った経済構造を温存したとはいえ、少なくとも麻紡績業の分野ではかなりの程度機械化を達成したのであり、決してシュレーゲン麻織物工業地域が消滅してしまっただけではない。したがって、仮にシュレーゲンのケースを「工業化挫折」と規定するにせよ、その意味内容を厳密に規定してゆく必要があるであろうし、他の類似の地域（アルスター北西部・中央部、フランドル、ブルターニュなど）に関するケース・スタディを積み重ねてゆく必要があるように思われる。

参照文献

1. ラーフェンスベルク / ビーレフェルト

- Adelmann, G., Die Stadt Bielefeld als Zentrum fabrikindustrieller Gründungen nach 1850, in: Ders., Vom Gewerbe zur Industrie im kontinentalen Nordwesteuropa, Stuttgart 1986.
- Angermann, G., Land-Stadt-Beziehungen. Bielfeld und sein Umland 1760-1860, Münster 1982.
- Aubin, H., Das westfälische Leinengewerbe im Rahmen der deutschen und europäischen Leinwanderzeugung bis zum Anbruch des Industriezeitalters, Vortragsreihe der Gesellschaft für Westfälische Wirtschaftsgeschichte e.V., Heft 11, Dortmund 1964.
- Brakensiek S., Agrarreform und Ländliche Gesellschaft. Die Privatisierung der Marken 1750-1850, Paderborn 1991.
- Ditt, K., Industrialisierung, Arbeiterschaft und Arbeiterbewegung in Bielefeld 1850-1914, Dortmund 1982.
- Ditt, K., Die Wäsche- und Bekleidungsindustrie Minden-Ravensbergs im 19. Jahrhundert, in: A.Lassotta und P.Lutum-Lenger(Hrsg.), Textilarbeiter und Textilindustrie. Beiträge zu ihrer Geschichte in Westfalen während der Industrialisierung, Hagen 1989(a).
- Ditt, K., Geschichte der Ravensberger Spinnerei 1854-1988, in: D. Ukena und H.J.Röver(Hrsg.), Die Ravensberger Spinnerei. Von der Fabrik zur Volkshochschule -- zur Umnutzung eines Industriedenkmal in Bielefeld, Hagen 1989(b).
- Ditt, K. und Pollard, S.(Hrsg.), Von der Heimarbeit in die Fabrik. Industrialisierung und Arbeiterschaft in Leinen- und Baumwollregionen Westeuropas während des 18. und 19. Jahrhunderts, Paderborn 1992.
- Düwell, K. und Köllmann, W.(Hrsg.), Rheinland-Westfalen im Industriezeitalter, Bd.1, Von der Entstehung der Provinzen bis zur Reichs-

gründung, Wuppertal 1984.

Engel, G., Ravensberger Spinnerei AG Bielefeld, Festschrift zum 100-jährigen Bestehen, Bielefeld, 1954.

Engel, G., Bielefelder Webereien Aktiengesellschaft, Bielefeld. Festschrift zur Hundertjahrfeier, Bielefeld 1965.

Flügel, A., Von der Interessenschaft zur Aktiengesellschaft. Zur Entwicklung der gewerblichen Organisationsformen im Bielefelder Feinleingewerbe 1774-1842, in: 79. JBHVR, 1991.

Flügel, A., Kaufmännische Orientierung und Mechanisierung. Das Feinleingewerbe in Ravensberg 1680-1890, in: K. Ditt und S. Pollard, [1992].

Mager, W., Protoindustrialisierung und agrarisch-heimgewerbliche Verflechtung in Ravensberg während der Frühen Neuzeit, in: Geschichte und Gesellschaft, Jg. 8., 1982.

Mager, W., Die Rolle des Staates bei der gewerblichen Entwicklung Ravensberg in vorindustrieller Zeit, in: Düwell, K. und Köllmann, W. (Hrsg.) [1984].

Mooser, J., Ländliche Klassengesellschaft 1770-1848. Bauern und Unterschichten, Landwirtschaft und Gewerbe im östlichen Westfalen, Göttingen 1984(a).

Mooser, J., Der Weg vom proto-industriellen zum fabrik-industriellen Gewerbe in Ravensberg, in: Düwell, K. und Köllmann, W. (Hrsg.) [1984](b).

Pollard, S., Region und Industrialisierung im Vergleich - Minden-Ravensberg und die englischen Industriegebiete, Vortragsreihe der Gesellschaft für Westfälische Wirtschaftsgeschichte e.V., Heft 25, Dortmund 1982.

Potthof, H., Die Leinenleggen in der Grafschaft Ravensberg, in: 15. JBHVR, 1901, S. 1-140.

Potthof, H., Vom Linnenländchen zur Industriestadt (gewerbliche Entwicklung von Bielfeld Ravensberg), in: 24. JBHVR, 1910.

Potthof, H., Das Ravensberger Leinengewerbe im 17. und 18. Jahrhundert in: 35. JBHVR, 1921.

(Sartorius, O.), Die Spinnerei Vorwärts. Festschrift zum hundertjährigen Bestehen, 1850-1950, Bielefeld 1950.

Schmitz, E., Leinengewerbe und Leinenhandel in Nordwestdeutschland (1650-1850), Köln 1967.

Vogelsang, R., Geschichte der Stadt Bielfeld, 2 Bde., Bielfeld 1980, 1988.

Wilbrand, J., Veröffentlichungen aus dem Archiv der Stadt Bielefeld, in: 19. JBHVR, 1905.

藤田幸一郎「西北ドイツ農村における「社会問題」の展開」『近代ドイツ農村社会経済史』（未来社，1984年），所収.

肥前栄一「北西ドイツ農村定住史の特質——農民屋敷地に焦点をあてて——」『経済学論集』第57巻第4号，1992年.

若尾祐司「プロト工業家族の歴史的位相」『歴史評論』第515号，1993年.

平井進「19世紀前半北西ドイツの農民・ホイヤーリング関係——東ヴェストファーレンを中心に——」，手稿，1994年.

2. シュレージエン

Frahne, C., Die Textilindustrie im Wirtschaftsleben Schlesiens. Ihre wirtschaftlichen und technischen Grundlagen, historisch-ökonomische Gestaltung und gegenwärtige Bedeutung, Diss. Tübingen, 1905.

Keil, G., Das niederschlesische Industriegebiet. Seine Entwicklung und Notlage, Berlin 1935.

Michael, E., Die Hausweberei im Hirschberger Tal, Jena 1925.

Schumann, O., Die Landeshuter Leinenindustrie in Vergangenheit und Gegenwart. Ein Beitrag zur Geschichte der schlesischen Textilindustrie, Jena 1928.

Zimmermann, A., Blüthe und Verfall des Leinengewerbes in Schlesien. Gewerbe- und Handelspolitik dreier Jahrhunderte, 2. Aufl., Oldenburg-Leipzig, 1892.

馬場哲『ドイツ農村工業史—プロト工業化・地域・世界市場—』（東京大学出版会, 1993年）.

3. ラーフェンスベルクとシュレーゲンの比較

Harder-Gersdorf, E., Leinen-Regionen im Vorfeld und im Verlauf der Industrialisierung(1780-1914), in: H. Pohl(Hrsg.), Gewerbe- und Industrielandschaften vom Spätmittelalter bis ins 20. Jahrhundert (VSWG Beiheft 78), Stuttgart 1986.

Harder-Gersdorf, E., Leinen-Regionen im Vergleich: Vom Handleinen zu den Anfängen der Fabrikindustrie in Ravensberg und Schlesien (1763-1862), in: 80. JBHVR, 1992/93.

表1 ビーレフェルトのレッゲで検査を受けた反物数 (1710~1870年)
 (1反=60エレ)

年	ビーレフェルト麻織物		ヴァーレンドルフ麻織物	反物総数
	薄手	厚手		
1710/11	—	—	—	(15,000)
1720/21	—	—	—	(23,250)
1721/22	15,907		4,601	20,793
1745/46	12,930		10,480	25,621
1755/56	17,076		12,392	31,887
1765/66	6,180	4,719	6,319	18,564
1780/81	5,097	1,186	15,734	23,188
1790/91	6,200	1,123	18,506	26,936
1797/98	5,622	1,053	28,582	36,456
1800/01	2,601	420	26,486	30,818
1810	921	228	31,769	35,276
1815	604	247	31,345	33,961
1820	261	111	19,935	22,749
1825	243	269	23,786	28,116
1830	118	31	34,404	38,294
1835	65	0	39,657	44,331
1839	—	—	—	51,984
1840	—	—	—	48,296
1845	—	—	—	59,371
1850	—	—	—	56,683
1851	—	—	—	63,148
1855	—	—	—	42,421
1860	—	—	—	31,103
1870	—	—	—	8,440

出典：A.Flügel[1992], S.115.

表2 ビーレフェルトのレッゲで検査を受けたビーレフェルト麻織物
とヴァーレンドルフ麻織物の割合の推移（1721～1844年）

期間	ビーレフェルト 麻織物	ヴァーレンドルフ 麻織物	合計
1721-22	75.5%	19.5%	95.0%
1743-55	52.1%	40.1%	92.2%
1756-62	58.2%	32.3%	90.5%
1765-67	62.7%	31.5%	94.2%
1780-89	26.4%	68.9%	95.3%
1790-1806	13.9%	81.8%	95.7%
1808-13	3.3%	88.8%	92.1%
1814-35	1.1%	84.4%	85.5%
1842-44	0.05%	90.6%	90.7%

出典：A. Flügel[1992], S. 111.

表3 ビーレフェルト市内
及び周辺部における織機数

1719年	1,167台
1787年	983台
1796年	1,663台
1806年	1,923台
1814年	1,413台
1843年	2,188台
1853年	2,052台

表4 ラーフェンスベルク伯爵領
におけるホイアーリング世帯数

1550年頃	103世帯
1672年	3,807世帯
1762年	4,295世帯
1794年	7,064世帯

出典：J. Mooser[1984a], S. 42.

出典：A. Flügel[1992], S. 111.

表5 ラーフェンスベルク伯爵領
からの麻織物輸出額

1755/56年	417,987ターラー
1770	382,076
1775	425,603
1783	704,212
1794	830,469
1798/99	1,110,128
1800/01	993,058

出典： H.Potthoff[1921], S.64.

表6 ラーフェンスベルク麻織物の輸出先構成
(リッペ麻織物の再輸出分を含む/1787/88年/単位：ターラー)

	漂白済 麻織物	レーヴェント・ 未漂白麻織物
ハンブルク, リューベック, ブレメン, イギリス, デンマーク	51,863	153,309
ブラウンシュヴァイク, ハノーファー, リューネブルク, ヒルデスハイム	70,842	
ヘッセン, リッペ, シャウムブルク	42,842	
オーストリア	53,588	
他の神聖ローマ帝国諸邦, スイス, イタリア	55,895	
ヴェストファーレンの他郡	56,258	
プファルツ, ユーリヒ, ベルク	63,712	
メクレンブルク, ホルシュタイン	52,038	
ポーランド, ダンツィヒ	51,583	
ロシア, リーフラント, クールラント	36,940	
他のプロイセン諸州	69,116	
合計	604,517	153,309

出典： H.Potthoff[1921], S.66.

表7 ビーレフェルトにおける機械制紡錘数と力織機数
(1860～90年)

	フォアウエルツ 紡績工場	ラーフェンスベルク 紡績工場	機械制 織布工場	就業者 合計
1860年	7,000 錘	14,200 錘	—	1,425 人
1870年	8,808	19,024	325 台	2,551
1880年	11,000	27,020	480	2,925
1890年	15,000	30,040	910	3,226

出典：A. Flügel [1992], S. 126.

表8 ビーレフェルトの人口の推移

1794年	6,017 人	1871年	21,803 人
1820	6,077	1875	26,377
1831	7,833	1880	30,679
1840	9,298	1885	34,931
1852	10,637	1890	39,950
1855	10,806	1895	47,455
1858	11,868	1900	63,046
1861	13,218	1905	71,152
1864	15,865	1910	78,380
1867	18,180	1914	82,580

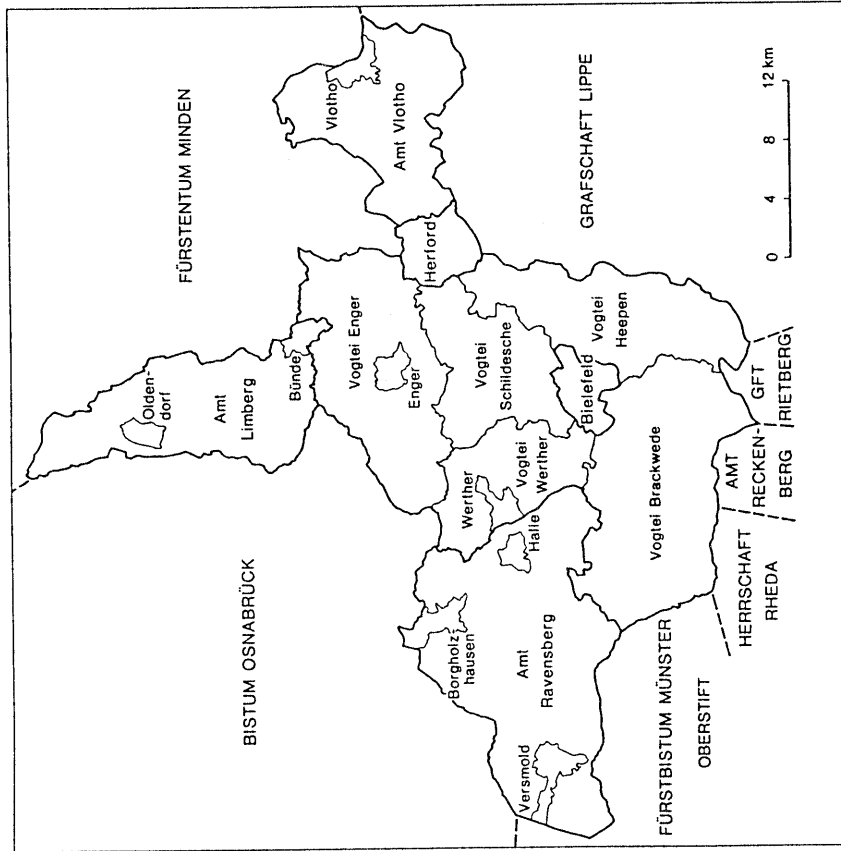
出典：K. Ditt [1982], S. 27, 79, 180.

表9 ラーフェンスベルク伯爵領とビーレフェルトの人口
(単位：人／カッコ内は%)

1843年	144,107(100)	9,427 (6.5)
1858	144,134(100)	11,868 (8.2)
1864	152,170(100)	15,865(10.4)
1871	155,803(100)	21,834(14.0)
1880	175,330(100)	30,679(17.5)
1895	224,241(100)	47,455(21.1)

出典：A. Flügel [1992], S. 126.

図1 1800年頃のラーフェンブレンスベルク伯爵領の行政区分

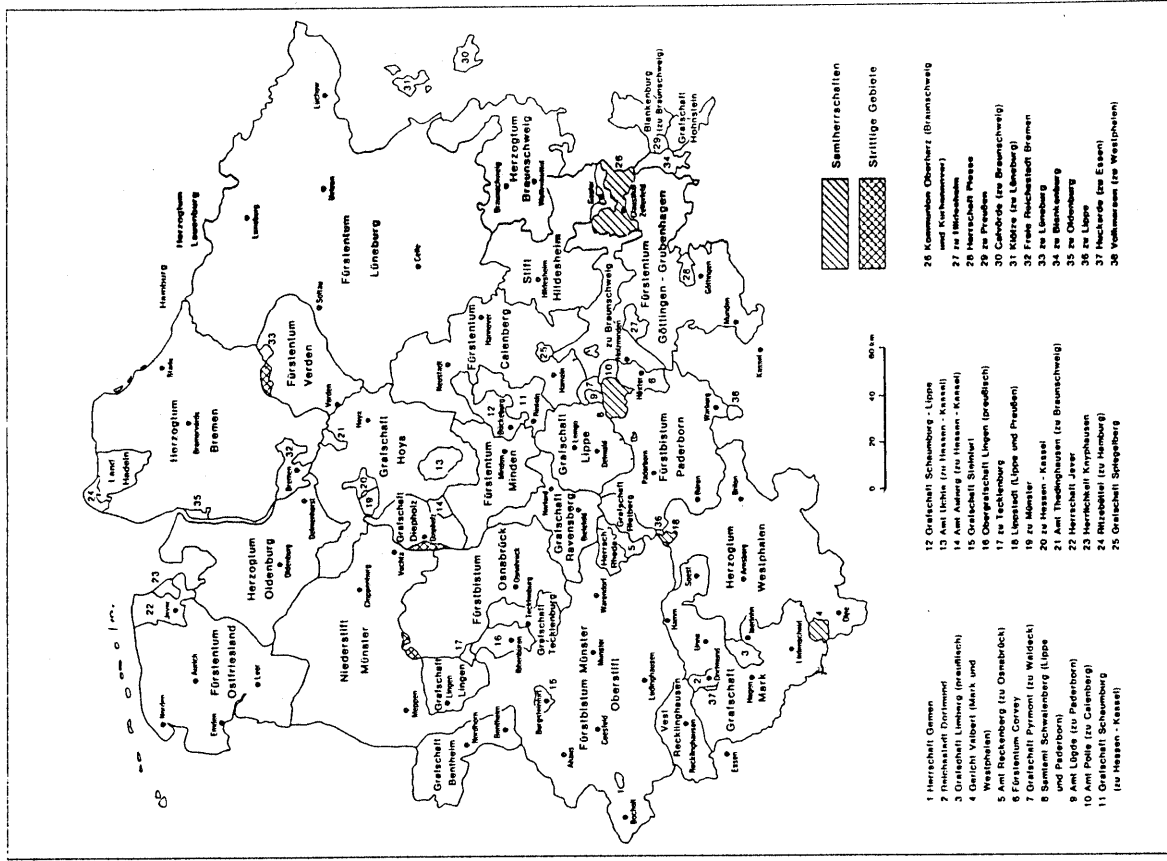


出典：S.Brakensiek, Agrarreform und Ländliche Gesellschaft.

Die Privatisierung der Marken in Nordwestdeutschland 1750-1850,

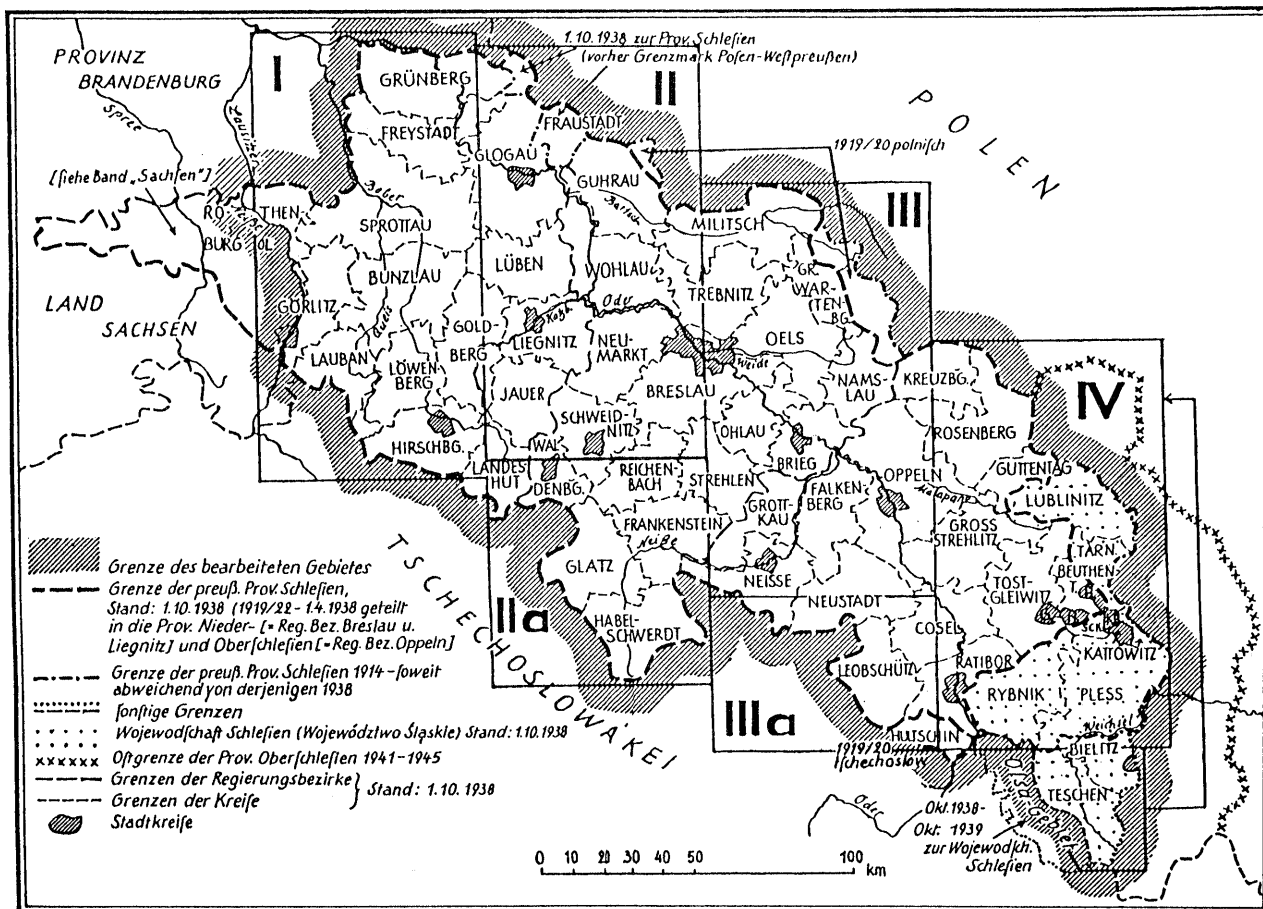
1991 Paderborn, S.23

図2 1800年頃のニーダーザクセンとヴェストファーレンの諸領邦



出典：S.Brakensiek, a.a.O., S.186.

図3 シュレージエン全図

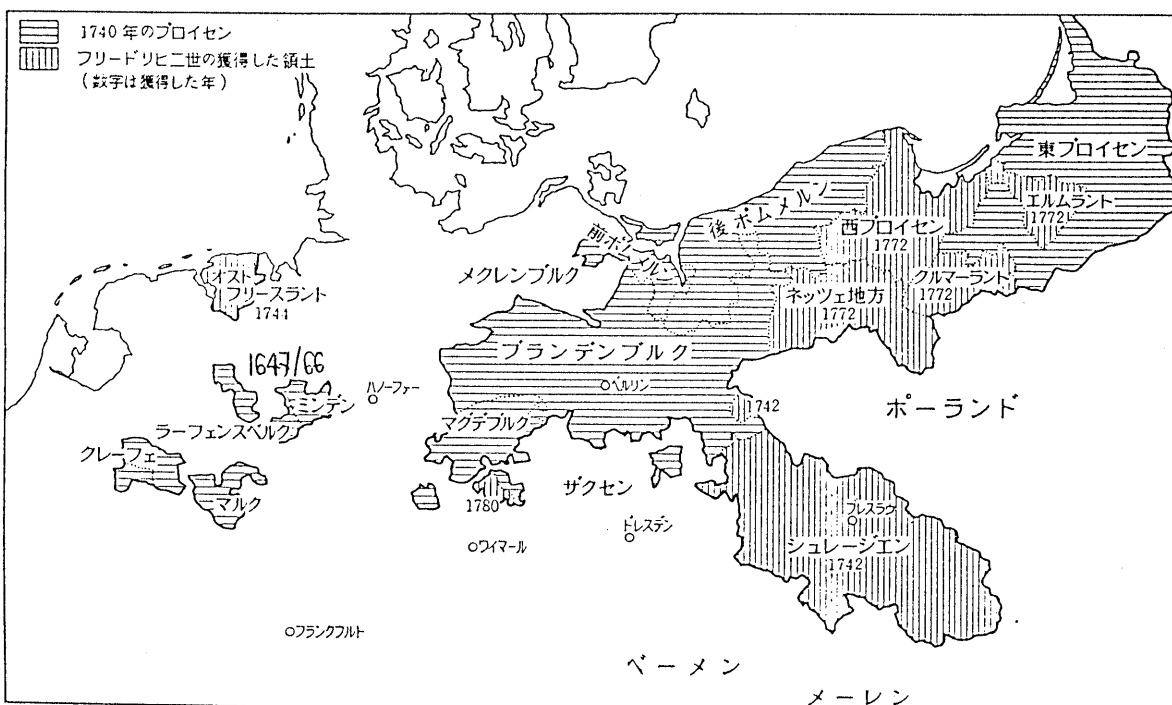


Die römischen Zahlen I-IV verweisen auf die Gebietskarten auf den Seiten 695-699.

Abkürzungen: B. = Beuthen; Beuthen-T. = Beuthen-Tarnowitz; G. = Gleiwitz; H. = Hindenburg; Kö = Königshütte; Sch. = Schwientochlowitz; Tarn. = Tarnowitz

出典: H. Weczerka, Handbuch der Historischen Stätten. Schlesien, Stuttgart 1977.

図4 プロイセン版図(1789年)



出典: 坂井栄八郎「18世紀のドイツ」『岩波講座世界歴史・近代4』, 岩波書店, 1970年, 336頁.